

オオバにおける冬作でのセル苗利用は収量の向上が期待できる

[要約]

冬作におけるオオバでは、セル苗を定植することで根鉢が無い地床苗よりも商品となる葉をつける側枝が5本程度多く発生し、2割程度の収量の増加が見込める。

茨城県農業総合センター 園芸研究所	成果 区分	技術情報
-------------------	----------	------

1. 背景・ねらい

本県のオオバは行方市を中心として周年栽培が行われているが、オオバの生育限界温度は最低 10℃と高く、暖房の経費がかかる作物の一つである。そこで、冬作において収益を高めるための栽培技術を検討する。慣行では地床育苗を行っており根鉢が無い苗を定植している。セル苗と地床苗の定植苗形態の違いが生育に及ぼす影響を明らかにする。

2. 成果の内容・特徴

- 1) 9月下旬、10月上旬、10月下旬のどの時期に定植しても、定植後3ヵ月ではセル苗は地床苗より主枝節数は多くなり、株あたりの側枝は3~5本程度多く発生する(表1)。
- 2) 定植後1ヵ月にはセル苗は地床苗よりも側枝の発生が多くなり、定植後2ヵ月からは5本程度多くなる。その後も生育の差は縮まらず、セル苗の側枝の発生は多く推移する(図1)。この結果は、9月下旬から10月下旬までどの時期の定植においても見られる(データ省略)。
- 3) 2月時点においてセル苗は地床苗より側枝を約2割多く発生し、収量は10aあたり約35万枚増加すると推定される(表2)。

3. 成果の活用面・留意点

- 1) 11月~2月のオオバの平均単価が1.1円/枚(東京都中央卸売市場3ヵ年の平均)のため、セル育苗により10aあたり約38万円の収益の増加が見込める。
- 2) 128穴セルを利用する場合、セルトレイと培土代は1.6円/株のため、10aあたり約1万9千円の経費がかかる(セルトレイ:減価償却5年、12,000株播種として計算)。
- 3) 「ひたち1号」は県育成品種であり、品種登録出願中である。

4. 具体的データ



図1 苗の形態
左 地床苗
右 セル苗:128穴セル

表1 育苗方法と定植時期の違いが生育に及ぼす影響

定植時期 ¹⁾	育苗法 ²⁾	草丈(cm)	主枝節数	側枝数 ³⁾
9月下旬	セル苗	34.9	9.7	21.6
	地床苗	30.7	9.2	16.6
10月上旬	セル苗	31.6	9.5	17.1
	地床苗	30.8	8.8	14.3
10月下旬	セル苗	31.9	9.1	13.4
	地床苗	28.1	8.3	10.3
分散分析 ⁴⁾				
定植時期(A)		*	***	***
育苗法(B)		**	***	***
A×B		NS	NS	NS

・定植3ヵ月目の調査結果(10株2反復)

1) 9月下旬(播種 H21.8/26 定植 9/22,)、10月上旬(播種 H21.9/8 定植 10/7,)、10月下旬(播種 H21.9/24 定植 10/24,)

2) セル苗:128穴セル育苗、
地床苗:地床に種子を播種し、根鉢が無い苗

3) 収穫可能な葉がついた側枝

4) ***0.1%水準、**1%水準、*5%水準で有意 NS有意差無し

【耕種概要】品種「ひたち1号」、育苗培土:与作 N150
株間 20cm 条間 30cm 2条千鳥 1本植え、施肥は耕種基準に準ずる、定植1ヵ月後に黒マルチ被覆、かん水 pF2.2 設定、内張被覆 10月～、暖房設定 11月～1月 12℃、2月～10℃

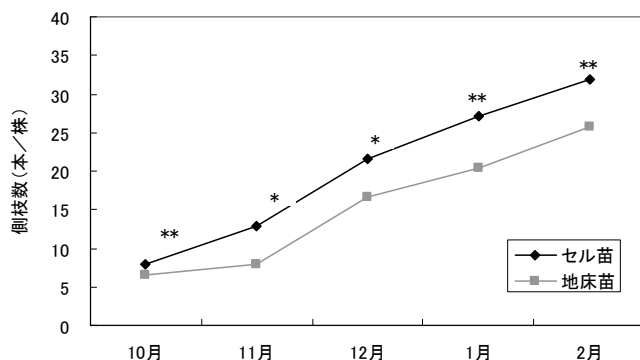


図2 育苗方法の違いと側枝発生の推移

**t 検定により1%水準、*5%水準で有意差あり(10株2反復)

【耕種概要】品種「ひたち1号」、播種 H21.8/24、定植 9/22、施肥は耕種基準に準ずる
株間 20cm 条間 30cm 2条千鳥 1本植え、定植1ヵ月後に黒マルチ被覆、かん水 pF2.2 設定、内張被覆 10月～、暖房設定 11月～1月 12℃、2月～10℃

表2 2月までの推定収量

	セル苗	地床苗
推定収量 ¹⁾ (千枚/10a)	1,908 (124)	1,542 (100)

1) 側枝数×6枚×10000株で計算

5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

現場ニーズ把握と新技術の迅速な普及のための調査事業・平成20年度・園研野菜研究室